

笹川保健財団 地域啓発活動助成
助成番号：2021-016（必ずご記載下さい）

2022年 2月 25日

公益財団法人 笹川保健財団
会長 喜多悦子 殿

2021年度地域啓発活動助成 活動報告書

標記について、下記の通り活動報告書を添付し提出いたします。

記

活動課題

心不全の在宅医療って何？

活動者（助成申請者）名： 弓野 大

1. 活動の目的

心不全が急増しているなか、どのように末期心不全患者が生活の質を保ちながら、豊かな在宅療養を継続できるかは、喫緊の課題となっている。当院の在宅医療が導入となった 1,600 名の後ろ向き観察研究を疾患別に予後調査を行うと、在宅がん患者は 1 年生存率 25%、3 年生存率 3%だったのに対し、在宅心不全患者は 1 年 75%、3 年 55%であった。これらのデータからも分かるように、通院困難な心不全患者にとって在宅医療は決して看取りの医療ではなく、生活の質を維持するための医療ツールのひとつであり、心不全の在宅医療の臨床的意義について、患者家族だけではなく、医療看護介護職への啓発活動は必要であると考えます。

日本全国、区民センターや貸し会議室などを利用し、心不全の病態や在宅医療に関する説明会を、その地域のニーズに合わせた内容で開催することで、心不全患者の在宅医療に関する具体的なイメージを持ってもらい、疾病予防から在宅療養、在宅看取りについて考えるきっかけづくりを目指す。

2. 活動の内容・実施経過

埼玉県新座市にある訪問看護ステーションの看護師より依頼があり、下記内容にて説明会を実施した。

日時：2022 年 1 月 22 日（土）14:30～16:30

会場：埼玉県新座市東北 2-29-35 ワイズブルミエ 2 階 会議室

講師：医師 田中 宏和, 看護師 室橋 友里, PT 村本 幸祐, MSW 押田 有紗

参加者：10 名

参加費：無料

【プログラム内容】

I. 心不全とは

II. 在宅医療の紹介

III. 地域でできる心不全の看護ケアのポイントについて

セルフケア指導・特指示の活用・心不全療養指導士・管制塔看護など

IV. 心不全の訪問リハ

生活活動調整・運動療法・環境調整・症状緩和など

V. 心不全患者の ACP

担当者会議などによる地域との ACP の積み重ね・再入院予防・在宅での緩和ケア

VI. 質疑応答

3. 活動の成果

【アンケート結果】※抜粋

勉強会に参加した理由

- 利用者で心不全患者が多く、知識を深めたい
- 在宅についての研修はなかなかないので興味を持った
- 心不全の在宅医療で困ることがあるため

地域の医療の現状について、課題に感じていること、困っていること

- 往診医とは ICT を利用して情報共有できるが、病院では共有が難しく、病態や治療方針を把握したい
- 循環器の診療科が少ない
- 在宅の利用者の不安を少しでもなくすることができるケア
- 何が原因の症状なのか等、分かりにくいことがある
- クオリティの差があることはとても気になる
- 連携がなく、医療情報はなかなか入ってこない、そもそも退院時カンファに訪問介護は呼ばれない
- サービス間の連携が取れるところと取れないところがある

在宅医療を行っている診療所に対して望むこと

- 医師も交えた定期的なカンファレンスやデスクカンファレンスを行いたい
- 連携の難しさを感じることもある
- なかなか患者さんの QOL について助言いただける医師が少ないことや、病院と同じ医療を持ち込む医師もまだまだ多く、家族側がついていけないことも多々ある
- ご本人の話を、時間をかけてよく聞いてあげて欲しい
- 情報をオープンにして欲しい、介護と医療は一緒に入ることができないが、話をする機会があると情報が得られてよい
- 福祉から医療へはハードルが高いので、気軽に相談できる場があるといい、MCS でしょうか
- 相談にのってもらいやすい環境を整えて欲しい

勉強会について

非常に良かった 4 良かった 5 普通 あまり良くなかった 良くなかった

ご参加いただいた感想など

- 癌の方だけでなく、心不全患者の緩和ケアについて意識が高まった。ACP を行い、療養場所の選択と、それに伴い病院や往診医へのアプローチを行っていききたい。
- もっと心不全の利用者の生活・心の中なども知り、在宅生活を送れるようサポートしていききたいと思った。
- 心不全・在宅医療の流れや考え方が理解できてよかった。リハビリについて、終末期の目的が

明確になっていてよかった。

- 心疾患に特化した訪問診療を行っていただけること、在宅療養支援室を設置されていることで、安心してお任せできるクリニックであることが分かった。私のいる地域にも、貴クリニックのような医療があったらと思った。
- 心不全の症状など、少し理解できたことや、リハビリの考え方や環境整備の大切さを知ることができたのが、今後に役立てられそう。
- 心不全の緩和医療についてはなかなか研修がなく、薬物療法についてや、その他の調整について学習することができ、貴重な機会となった。心不全の方はたくさんいらっしゃるのので、アセスメントしていくうえで、今日の知識を活用していきたい。

4. 今後の課題

超高齢社会を迎えた日本では、今後ますます高齢の心不全患者が増加することが予想されており、再入院の回避や在宅医療への移行など、早急な対策が必要となっているが、現状では、地域における心不全患者の在宅医療の受け皿は不足している。その原因には、地域には心不全を専門にしている医療介護従事者が少ないことや、地域に任せていいのだろうかという不安や、病院をかりつけにしたいと考える患者さんが多いことなどが挙げられる。また、患者だけでなく、実際には多くの医療介護従事者も、心臓が悪いというだけで不安を感じているという現状があり、今回の勉強会を通じて、私たちが啓発活動を行っていくことの必要性を改めて感じた。

地域ぐるみで、心不全患者の在宅療養を支えるためには、施設の垣根を超えた多職種連携が重要であり、地域へ積極的に働きかけ、連携を深めるカンファレンスや勉強会なども継続的に開催していきたい。

問い合わせをいただいたが、コロナ禍ということもあり 1 回しか開催できなかったため、コロナが落ち着いた後に、また別のかたちで開催できるよう企画したい。

5. 活動の成果などの公表予定

なし